

## 二つの自然観

### ―芭蕉とワーズワス―

上 島 建 吉

東と西に地球を半周するほど距たっているのに、日本とイギリスはいろいろ似通ったところが多い。両者とも大陸を間近に控えた島国で、文化的には先進大国の強い影響を受けながら、民族的には孤立した道を歩んできた。国語の発達過程も似ており、二系統の言語が癒着して豊かな語彙を誇っているのは英語と日本語だけである。国民はともに昔から自然に惹かれ、詩を詠み、戯曲に親しんだ。その結果文学にもパラレルな現象が生じ、西にシェイクスピアあれば東に近松あり、東に芭蕉あれば西にワーズワスありといった具合である。

なかでも芭蕉とワーズワスは、東西を代表する自然詩人として、日本では明治以降しばしば比較対照されてきた。しかし一般には、詩の表面にあらわれた両者の共通点を指摘し鑑賞するにとどまっていて、自然に対する両者のアプローチの違いから東西の自然観そのものの相違に言及した論は少ない。筆者は昭和六三年に『文学の東西』と題する放送大学の総合講座でこの問題を論じたこ

とがあり、以下その「教材」<sup>(1)</sup>に手を入れたものをお目にかけて、北澤先生始め同好の士のご批判を仰ぎたい。

日本にワーズワスの名が初めて紹介されたのは明治四年のことであるが、それ以後しばらくは、その「渾身の思想」ゆえに、どちらかといえばキリスト教関係者の間でワーズワスの評判が高められたこともあった。しかし翻訳等でその詩作品が世間に浸透するにつれ、人びとは詩そのものの魅力を感じ始め、当代でもつとも身近な西洋文学として意識するようになった。その理由がどこにあるかを、まず述べておこう。

ウィリアムワーズワス William Wordsworth (一七七〇―一八五〇) はアメリカの独立、フランス大革命などヨーロッパの激動期に生まれ育ち、ヴィクトリア朝の半ばまで生きた。文学史上はロマン主義の時代に属し、イギリスロマン派の筆頭に数えられている。しかし同じロマン派でもバイロンやシェリーと異なり、ワーズワス

の文学にはいわゆる「ロマンチック」な要素というものが稀薄である。つまり灼熱の恋を歌ったり、夢や空想の世界に遊んだりすることがあまりない。むしろそうした傾向を詩作からは意図的に排除し、もっぱら天地山川を友として花鳥風月を歌ったという点で、ワーズワスの詩は漢詩や俳諧など、東洋の伝統文化と通ずるものがあり、日本人の感性に訴えるところが多かった。一例として黄水仙をうたった有名な詩を読んで見たい。

谷また丘の空高く

ひとり漂ふ雲のごと

さまよふわれのふと見しは

群れ集ひたる黄水仙

湖水のほとり木々の下

風にひらめき踊るなり

きらめく星の切れ目なく

連なる銀の河に似て

涯なく続くその帯は

汀に沿ひて延びるなり

ひとめ百千の花頭

風に浮かれて踊るなり

かたへの波もともどもに  
きらめき踊る嬉しさに  
詩人われも心浮き  
愉しき仲間に加はりぬ  
眺め眺めて——その後  
に残りし富を知らざりき

時経て寝椅子に身をゆだね  
つれづれ侘ぶる目の奥に  
かの花々のひらめくは  
ひとりある身の冥利なれ  
すなはち充つる歓びに  
われ水仙と踊るなり

翻訳では印象がうすいけれども、最初の二行には孤独と漂泊の詩人の姿があらわれている。これは行雲流水の旅に生きた西行法師を偲ばせ、また「片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず」と語った『奥の細道』の作者を思い起こさせる。そしてこのさすらいの詩人がふと目にした花に心を動かされるさまは、芭蕉の

山路来て何やらゆかしすみれ草

と共通する。「すみれ」と言えばこの句にもっと似通った一節がワーズワスにある。

苔むす石のかたはらに

人目を避けて咲くすみれ

これはルーシーという名の、人知れず生き人知れず死んだ架空の乙女を歌った短詩の一部であるが、明治の頃の日本の女性像、いわゆる「やまとなでしこ」の理想にきわめて近い。

ところがそれでいて、ワーズワスの黄水仙の詩と松尾芭蕉（一六四四—一九四）のすみれの句とは、自然に対する作者の姿勢において、明らかに違っている。次に両者の相違点について考察してみよう。

最初にあげた黄水仙の詩と芭蕉のすみれの句とが、ともに花から受けた感動を描写していることに変わりはない。しかし後者が「何やらゆかし」と言って「ゆかし」の内容には触れていないのに対し、ワーズワスは自分の感じた「歓び」がどんなものであり、なぜ生じたかを仔細に説明している。

もちろん十七文字からなる俳句と、のべ百五十語にも及ぶ抒情詩とでは、情報の量や叙述の仕方に関連が生ずるのは当然であろう。けれども同じ芭蕉の発句でも、人事にかかわる句では、何百語の抒情詩に劣らぬほどの情念が伝達されている場合がある。たとえば旅の途中、会うことを楽しみにしていた俳人の死を知らされた時の慟哭の句

塚も動け我泣こゑは秋の風

あるいは佐渡の流人の断腸の思いに涙した句

荒海や佐渡によこたふ天河

さらには辞世の句と言われる

旅に病で夢は枯野をかけ廻る

などが例として挙げられるが、これらについてここで論ずるつもりはない。いま問題にしたいのは、次に挙げる

古池や蛙飛こむ水のをと

閑さや岩にしみ入蟬の声

よく見れば薺花さく垣ねかな

などのように、単純に自然の風物を詠んだ句である。ここには事実の描写だけがあって主観的感情の叙述は一切含まれていない。このことから「わび」とか「さび」とか「軽み」とかいふ、蕉風俳諧独特の用語が専門家の口に上るわけだが、私見では、これは、観念や技法の問題ではなく、自然に対するアプローチの問題であると思う。その点について、ワーズワスと芭蕉との間にどんな相違がありうるだろうか。

柳父章氏は、その著『翻訳の思想』のなかで、英語の nature と日本語の「自然」との異同を詳しく論じている。ギリシャ語の physis ラテン語の natura に発する西欧思想史上の自然は、一方において人為的なもの、精神、意識などと対立し、他方において超自然的なもの、神や霊

などと対立していた。natureが物質界、森羅万象という意味をもつに至ったのは、プラトンやキリスト教以来の伝統であるという。これに対し日本語の「自然」には、本来物質界、すなわち天地万物という意味はなかった。それは主として「おのずから」「ひとりでに」という副詞的な意味<sup>③</sup>でつかわれていたが、明治以降、各分野で、natureの翻訳語として利用されたために、「天然自然の理」などという表現を経て、現在は「自然界」「天地山川」という意味も兼ね備えるようになったという。氏自身の言葉を引いてまとめるならば、

意味の面で言うと、英語の nature は物質界、物質的存在を意味している場合が多い。人間の精神や意識と対立する意味である。日本語の「自然」にはこのような意味はもととない。「自然」ということは、むしろこのような意識的な区別を拒否する意味である。nature は人間主体と対立する客体的な世界を意味する場合が多い、と言いうことができれば、「自然」は、これに對して、いわば主客未分の状態、境地を語っているのである。このことから、nature は知識の対象と考えられる場合が普通だが、「自然」はそうではない。「自然」はむしろ知識を否定するとも言える。

(『翻訳の思想』四八ページ)

ワーズワスにとって自然はまさに客体であり、他者であった。それは主観と対立するものであり、対立するゆえに敵としてこれと戦うか、または味方として合体し、融合し、一つになるか、どちらかであった。ワーズワスの場合、ときにそれが、まるで恋人のように迫ってきたとしても不思議ではない。

鳴り響く滝の音は

情熱のように私につきまとった。高い岩、  
山、そして奥深く、ほの暗い森は、

その色合、その姿は、当時の私にとって、  
一つの情欲であった。

また、郭公の声を聞いては、

おまえを求めてよく私は

森や野ををさまよったものだ。

おまえは常に望みであり愛であり、

憧れるだけで、ついに見えないものだった。

そうして折ふし、自然との合一が達成される稀有の瞬間が訪れる。その時の状態は次のごとくである。

やさしい情愛にみちた、

しみじみとした気分浸っている

やがてこの肉のからだの息づきも

からだのなかの血の動きさえも、

ほとんど停止して、肉体は眠り、

私たちは生きながら靈魂<sup>たましい</sup>となる。

そのときまなざしは静かに澄み、

調和と、深い喜びを内に湛えて

事物<sup>もの</sup>のいのちまで見通すのだ。

最初に挙げた黄水仙の詩で、「孤独の恵みである内なる目にひらめいた」花の群は、こうした主客合一の法悦のなかから、「事物のいのちまで見通した」結果のウィジョンであって、現実の、客体のままの、黄水仙ではなかったのである。

芭蕉の場合、花鳥風月は必ずしも対立すべき客体ではない。彼が弟子に述べた次の言葉は、まさに自然の事物を初めから客体として見る態度を、いましめた訓戒ではなからうか。

松の事は松に習へ、竹の事は竹に習へと師の詞有りしも、私意を離れよと言ふ事なり。此の習へと言ふ所をおのがままに取って終に習はざるなり。習ふと言ふは、も

のに入りて其の微<sup>あはれ</sup>の顯れて情感するや句となる所なり。たとへ物あらはに言ひ出でても、其の物より自然に出づる情にあらざれば、物二ツになりて、其の情實に至らず。私意のなす作意なり。

(土芳『あかざうし』)

そうしてみると最初のすみれの句で、作者がなぜ「何やらゆかし」と言つてあえてその感動を説明しなかったかがわかる。芭蕉は初めから「ものに入りて其の微の顯れ」るところをすみれとともに情感したのであり、ワーズワスのように、それに至るまでのプロセスをわざわざ叙述する必要がない。そんなプロセスはそもそも存在しないからである。また「其の微」が何であるかを意識化して解明する気持もない。そんなことをすれば主体と客体と「物二ツ」になるからである。「ゆかし」とは芭蕉とすみれとの主客合一の情感、柳父氏の言葉を借りれば「主客未分の状態、境地」であって、まさに「知識を否定する」ものにはかならない。

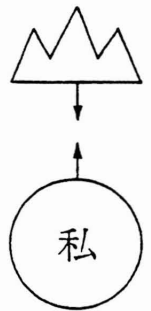
したがって芭蕉は、その句作において、常にワーズワスが到達した境地が発効していると言える。が同時に、必ず、ワーズワスが発効した客体の世界に戻っているととも言える。芭蕉は『笈の小文』のなかで、「造化に随ひ造化に帰れ」と言っているが、主客合一の境地を単に情感の域にとどめず、それを平凡な事物の世界に還元す

ることを「輕み」と称しているのではないか。古池の醸し出す幽玄な雰囲気埋没していた詩人は、蛙の飛びこむ音でふと我に返った。見るとそこに古池があった。寺を囲む岩山に蟬が鳴いている。その沁み入るような蟬の声をふと意識したとき、岩肌に深い静けさが潜んでいることに気がついた。とある垣根の根もとを見るともなく見ている。ふとそこに白いなすなの花を認めたとき、実はそれが原因で自分は垣根に目を惹かれていたのだと悟った。

いずれの場合も初めに主客合一、物我一如の無意識の境地がある。そこからふと客体が飛び出して耳目に映ずるとき、最初の主客未分の状態が意識されると同時に、そうした意識そのもののまで客体化される——幽玄の思いは古池となり、閑寂の感は岩肌となり、「もののあはれ」の認識は垣根の花と化するのである。

ワーズワスと芭蕉との間の、自然に対するアプローチの差をさらにあきらかにするために、ここで「愛する」(love)と「好き」(like)という二つの言葉のもつ意味を比較してみたい。英米でも日本でも、両者の差は程度の問題で実質的には同じと考えている人が多いが、違うと言え<sup>(5)</sup>ば違<sup>(5)</sup>う。

「愛する」という感情や行為は他者の意識を前提としている。つまり、自分の外にあり、自分と向かい合う対



象をまず意識し、それと合体するか、それを自分のうちに取りこもうとする欲望や意志や

行為が「愛」である。たとえば「私は山を愛す」と言うとき、山は恋人のように、征服されるべき他者として自分と向かい合っている感じである。当然相手もこちらに働きかけることを期待するが、その期待が裏切られても(たとえば、山で遭難しても)愛することはやめなないかも知れない。愛はしばしば意志の問題であり、キリストの説くように「敵を愛する」ことさえ可能である。

これに対し「好き」という感情は「性に合う」という意味で、同じ対象でもすでに自分のうちに取りこんでいるもの、合意しているものの再認識である。それは物理的に他者であっても心理的には他者ではない。「私は山が好きだ」と言う場合、山はすでに私の一部として心のなかに座を占めており、いまさら「愛する」必要などない状態を意味する。これがすぐれて日本的な感情であることは親兄弟に当てはめてみるとわかる。「弟が好き」



とは言うが「弟を愛する」とはふつう言わない。どこまでも個を重んずる西欧社会では、物ごろのついた家族はすべて他人であり、したがって家族間

で Love という言葉を使うことに何のためらいもない。

日本人の場合、妻や夫に対してさえ面と向かって「愛する」とは言いにくい。仲が良ければ良いほど、自分の一部となっている者を他人扱いするのは水くさいと思う。

もちろん日本人本来の心性や習慣のなかに「愛する」に相当する感情や行為がなかったわけではない。「恋う」

「慕う」「焦がれる」「いつくしむ」「いとしむ」「かわいがる」などの言葉がそれを表わしている。異性や幼い子どもがまず他者として意識されることは洋の東西を問うまい。しかし日本人の間で、すでに家族など生活共同体の一員となっている者に「愛」を感じることがあるとすれば、それは離別か死別かのために、対象との間に物理的に距離が生じ、否応なしに他者として意識せざるを得なくなった場合である。『山椒太夫』に登場する老いた母が「安寿恋しやほうやれほ。厨子王恋しやほうやれほ」と歌って雀を追うのは、この子たちが人買いに奪われて、いまは手許にいないからである。

以上の考察から、ワーズワスと芭蕉との相違は結局、自然に対して「愛」を中心とする西欧的情念を抱くか、「好き」を基調とする東洋の心境に浸るかの差異と解釈することができる。あるいはドイツの詩人シラー（一七五九—一八〇五）の有名な区分に従えば、「情感文学」と「素朴文学」との差と言っていいかも知れない。前者

は自然をあくまで他者と見て、それに憧れ、それに働かせる態度から生まれ、後者は自然を同居者と見て、共に生き共に楽しむ姿勢から生ずる。「花に啼く鶯、水に住むかはづの声を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける」という紀貫之の言葉は、まさに世界最初の素朴文学宣言ではなからうか。

「愛」が単に受け身の感情だけでなく、主体的な意志や行為をも含む以上、それに基づく情感文学はしばしば自然を理想化し、あらゆる人倫の原点として、あるいは人生の究極の目標として、自然への熱愛を語ることがある。ワーズワスの次の詩はその代表と言っている。

私の心が躍るのは

空に虹を見るとき

人生の始めがそうだった。

大人のいまもそうだ。

年を取ってからもそうありたい、

でなければ死んだ方がいい。

子どもこそ大人を育てる者。

願わくはこれからの一日一日が

自然を敬う心で結ばれますよう。

ワーズワスおよびイギリスロマン派の詩人にとって、

自然は恋人に始まり、神に近い存在にまで高められるのである。

自然と人間、あるいは自己と他者とが一体となり、共に生き共に感ずる境地を歌った「素朴文学」の代表として、芭蕉の次の句を挙げよう。

### 秋深き隣は何をする人ぞ

隣家には人がいる。それは確かである。にもかかわらず、ことりとも音がしない。一体何をして暮らしている人だろう——そう思ったとたん芭蕉は、さきほど来<sup>も</sup>あたりが恐ろしいほど静まり返っていることに気がついた。そうだ、秋が深まっているのだ。そのなかで自分も、隣人も、そして天地万物も、すべてがひっそりと孤独に時を送っている。この万物普遍の隠れた孤独感を芭蕉は「さび」と名づけた。それはひそかな隣人という客体に集約された、宇宙と人間とにかかわる実存的認識だったのである。日本人は自然愛好国民であると言われる。しかしその意味をよく考えてみなければならない。芭蕉に代表されるかつての日本人は、衣食住すべてにおいて自然とともに生き、自然とともに感じていた。その頃の日本人は自然が「好き」であり、そして好きであることも意識しなかった。今日、なにかも西欧化した日本では、生活か

ら自然を閉め出してしまった。家の造りも変わり、季節ごとの行事もすたれた。自然は西欧におけるように、心理的にも他者となった。自然が恋しいと言い、自然を愛そうなどと声高に叫ぶことは、それだけ自然がわれわれから遠ざかったことを示している。日本にいながら、真に日本的な風土から距たってしまったのである。

京にても京なつかしやほととぎす

### 注

1 辻理・芳賀徹編『文学の東西』（放送大学教育振興会、一九八八）二九五―三一二ページ。

2 早くも明治二十六年、夏目漱石は「英国詩人の天地山川に對する觀念」と題する論文で、「ウォーヅウォース」を「自然の為に自然を愛した」詩人として最高の位置にしている。なおワーズワスが漱石のほか國木田獨步や蒲原有明など明治の文学者に及ぼした影響については、島田謹二著『近代比較文学』（光文社 一九五六）四六三―四七四ページを参照のこと。

3 昔は「じねん」とも読み、「自然薯<sup>じねんじょ</sup>」などの語に本来の意味が残っている。

4 詩人の妹ドロシーの日記（一八〇二年四月一五日

付)によると、兄と二人で実際に見た黄水仙の有様はこの通りではなかった。

5 言葉というものは万人が常に正当な意味で使うとは限らない。緑色を青いと言う人には、また言う場合には、「緑」と「青」との間に意味の差はない道理である。したがって「緑」と「青」は、違うとすればどう違うか、と問うよりほかにない。

6 フリードリッヒ・フォン・シラー著『素朴文学と情感文学について』(岩波文庫 一九五五)を参照のこと。ただしシラーは西欧の古典文学と近代文学についてこの区分を当てはめたのであって、西欧文学と東洋文学とを比較しているのではない。

7 H・G シェンク著、生松敬三ほか訳『ロマン主義の精神』(みすず書房 一九七五)二〇九―二二九ページ「自然神秘主義」の項、およびケネス・クラーク著、河野徹訳『芸術と文明』(法政大学出版局 一九七五)二六一―二八六ページ「自然崇拜」の章を参照のこと。